

感じられた身体

——トランスジェンダーと『知覚の現象学』——

The Felt Sense of Body:
Transgender and *Phenomenology of Perception*

藤高 和輝*

1 病理学に抗して

トランスジェンダーとは、出生時に割り当てられた性別に違和感をもち、それとは異なる性を生きる人々のことを指す言葉である。日本では「性同一性障害者」という呼称で広く知られているが、「性同一性障害」は「診断名」であり、すべてのトランスジェンダーがこのような「病名」を受け入れているわけではない。この「性同一性障害」という呼称は“Gender Identity Disorder”の翻訳であり、現在のDSM（『精神疾患の診断・統計マニュアル』）ではもはやこの呼称は用いられておらず、代わりに「障害」という語はなくなり、「性別違和（Gender Dysphoria）」という言葉に取って代わられた。しかし、この「性同一性障害」という呼称から分かるのは、トランスジェンダーの存在がまず歴史的に「病理学化」され、「異常視」されてきたということであり、さらにつけ加えれば、トランスジェンダーは「精神疾患」のカテゴリーに数え入れられていた／いるということである¹⁾。

本稿で私が行いたいのは、このような病理学的な分析枠組みを批判的に問い直すことであり、さらには、オルタナティブな非病理学的な分析枠組みを提示することである。その上で私は、「ジェンダー・アイデンティティ」や

*大阪大学人間科学研究科助教

「心の性」といった概念を批判的に検討することになる。より正確に言えば、このような概念が用いられる背景にある「真理の体制」を問いに付したいのだ。そして、「ジェンダー・アイデンティティ」や「心の性」という概念に代わって提示したいのが「身体イメージ」の概念である。このような観点から、本稿ではメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』に着目することになる。そして、その哲学の重要性、それがいかにトランスジェンダーの研究に資するかを示すことになるだろう。

トランスジェンダーに程度の差はあれ共通している経験は、「間違っただ身体」を生きているという感覚である。実際、多くのトランスジェンダーはしばしば、「間違っただ身体で生まれた」と訴える。それは、「自分が思い描いている身体」と「実際の物理的な身体」とが食い違っているという経験である。この点に関して、ジェイ・プロッサーは『第二の皮膚』のなかで次のように述べている。

私の主張は、トランスセクシュアルが間違っただ身体性というイメージを展開し続けるのは、間違っただ身体に捕らわれているということがまさにトランスセクシュアリティがそのように感じるものだからである、というものである。もしトランスセクシュアルの性別移行のゴールがジェンダー化された身体性の感じを物質的な身体と合わせることであるなら、身体イメージ——私たちはそれを想像的なものと同列に並べるよう誘惑されるかもしれない——は明らかにすでにトランスセクシュアルにとって物質的な力をもっているのである。間違っただ身体に捕らわれているというイメージはこの力を運ぶのだ。それは、まず、いかに身体イメージが物質的な身体と根本的に分裂しているかを示しており、いかに身体イメージがトランスセクシュアルに彼あるいは彼女の身体を身体イメージに一致するように変えるよう促すものとして十分に実体的なものと感じられうるか、を示している。(Prosser, 1998, p. 69)

トランスジェンダーのこの「間違っただ身体に捕らわれている」という経験に関して、通常では、「体の性と心の性の不一致」という説明が与えられるが、ここでプロッサーが提示している説明はそれとはやや異なるものである。プロッサーがここで提示しているのは、「心の性」ないし「ジェンダー・アイデンティティ」ではなく、「身体イメージ」である。彼に従えば、この「間違っただ身体」という感覚は、「体の性」と「心の性」の不一致というよりは、「物質的な身体」と「身体イメージ」とのあいだの不一致によって生じているのである。そして、この「身体イメージ」は、そのイメージに「物質的な身体」を近づけようとする「物質的な力」をもつ、とプロッサーは指摘している。

以下で私が行いたいのは、この「身体イメージ」の観点からトランスジェンダーの「性別違和」という身体経験を考察することである。そのためにまず、吉永みち子『性同一性障害——性転換^{あした}の朝』で紹介されている森田真一の次の語りを手がかりとしたい。

体毛とか男性的な特徴はなくなってほしいとは感じます。いかにも男らしい部分には生理的な嫌悪感を覚えます。女性の身体が欲しいとは思わないんですが、よく夢を見るんです。自分の胸に乳房がついている夢なんです。それも欲しいというのではなく、あるはずだという感じです。ペニスもなくしてしまいたいとは思いますが、膣があるはずだという確信に近いものがあるんです。性的に興奮した時など、ペニスがあるのに、膣が濡れた感触を確かに感じるんです。事故で手足を失った人が、すでにないのにあたかも手足がそこにあるような痛みを感じるっていいですよ。僕は経験はないんですが、そんな感じなのかなと想像することがあります。(吉永, 2012, pp. 162-163)

森田は「自分は何者なのかと模索する中で、ゲイやレズビアン、あるいは

トランスセクシュアル、トランスジェンダーなどのコミュニティに身をおいてみても、どこにもしっくりこないという人が実はけっこういるんです。僕もそうなんです」(吉永, 2012, p. 159) と述べ、自身も含めたそのような人たちの存在を「X - ジェンダー」と命名している²⁾。森田自身は「男性的な特徴が現れてくるのは、イヤだったが、かといって女性になりたいとも思わない」(吉永, 2012, p. 162) という状態を生きているという。その森田が語るところによれば、物理的には存在しないはずの「乳房」や「膣」の存在が生き生きと経験されている。このような「乳房」や「膣」の存在が「身体イメージ」という概念で私たちが捉えようとしているものに当たるとひとまずいっておこう。とはいえ、このことはトランスジェンダーの人たちがみな一様な仕方では「身体イメージ」をもっていることを意味しないし、むしろ、「身体イメージ」は多様な仕方では生きられるものである。いずれにせよ、森田に認められるような「感じられた身体」の経験をどのように読み解けばいいのかを以下で考察していきたい。

2 「妄想」の枠組み

森田に認められるようなトランスジェンダーの経験をどのように捉えるべきかという問いに進む前に、このような経験は歴史上どのように捉えられてきたかという問いを考察しておかなければならない。はじめに述べたように、トランスジェンダーの経験は二十世紀においてまず「精神疾患」として扱われてきた。そこで、このような既存の病理学的図式をまず批判的に検討する必要がある。

ここであえて、「性同一性障害」という呼称が消える前の DSM-IV の「性同一性障害」の項目を紐解いてみよう。そこでは、「性同一性障害」をもつ人は、「反対の性に対する強く持続的な同一感」と「自分の性に対する持続的な不快感、またはその性の役割についての不適切感」をもつと説明されてい

る（米国精神医学会, 2004, p. 551）。それに対して現在の DSM-V では「反対の性への帰属意識」という記述はなくなっている。これは、トランスジェンダーの人すべてが必ずしも「反対の性」になりたいと考えるわけではないということ（まさに森田がそうだった）を配慮してのことである。だが、DSM-IV の記述から分かるのは、トランスジェンダーは身体的性とは反対の性になりたい人だ、と歴史的にみなされてきたという点である。

ここで考察したいのは、トランスジェンダーの経験はなぜ「疾患」に数えられたのかということである。より正確に言えば、ここで私がとりわけ関心があるのは、トランスの経験はなぜ、とりもなおさず「精神疾患」とみなされてきた／いるのかという点である。この点に関して、ゲイル・サラモンは次のように述べている。

トランスセクシュアリティが誤って病理として解釈されるとき、それは大抵、自分が属していない性別の性器をもつと空想する精神的な混乱として特徴づけられる。トランスセクシュアリティが神経症というよりも統合失調症として特徴づけられるのはこのような幻想にもとづいており、それによって自分自身の身体の誤認は現実からの逃避を示すものとして解釈される。この論理が示しているように、身体の物質性は現実の裁決者である。（Salamon, 2010, p. 55）

したがって、トランスジェンダーを精神疾患とみなす背景には次のような推論が認められることになるだろう。すなわち、「自明で客観的な物質的身体がまずもって存在し、それに対してジェンダー・アイデンティティ（ないし「心の性」）が「身体とは反対の性別」になっており、食い違っている」という描写である。そうなると、この図式においては、トランスジェンダーの性別違和は「身体」ではなく「心」の問題として考えられることになる。一言で言えば、「性別違和」は（統合失調症を特徴づける）「妄想」の一種とみ

なされるのだ。そのため、森田の「臆」や「乳房」の経験はこの病理学的図式の内部では単なる「妄想」や「精神的な混乱」として解釈されることになるだろう。

哲学の立場から言えば、このような精神医学の見方はいわゆる「心身二元論」の立場に立った見方である。つまり、そこでは「心」と「身体」は別々の実体として峻別されている。さらには、この病理学的図式のなかで「真理」や「客観」を握っているのは「身体」であり、「物質的身体」であるとされている。「身体こそが真理である」、「物質的身体が間違うはずはない」、「物質的身体はあまりにも自明である」——このような物質的身体という「真理」こそが、トランスジェンダーの「性別違和」を「精神的な混乱」として解釈させることになるのだ。逆に言えば、トランスジェンダーの性別違和を「心の問題」とみなすことは物質的身体の自明性を担保にすることによってはじめて可能になっているのである。サラモンが述べていたように、この図式において「身体の物質性は現実の裁決者」なのである。

したがって、トランスジェンダーの「性別違和」の経験を「精神的な混乱」というカテゴリーに当てはめる前提には次のような推論が働いている。それは、「物質的な身体」こそが「現実」、あるいは「現実」の「保証人」や「裁決者」であり、したがって、それから逸脱する身体イメージは「非現実」であり「妄想」である、という仮定である。物質的に存在する身体は誰の目にも明らかな「真理」であるのだから、それから逸脱する身体イメージは「非現実」な「妄想」であり、したがってそれは「心の問題」だ、というわけである。それゆえ、トランスジェンダーの経験を病理学的な図式とは異なる仕方ですら記述する可能性を探るためには、このような「物質的身体＝現実／身体イメージ＝非現実」という支配的な等式を批判的に検討する必要がある。

そのような試みの手がかりはすでに、先に引いた森田の語りのなかにある。森田は、物理的には存在しないが「あるはずだと確信している」自らの乳房や臆の存在を「幻影肢」に喩えていた（「事故で手足を失った人が、す

でないのにあたかも手足がそこにあるような痛みを感じるっていいですよね。僕は経験はないんですが、そんな感じなのかなと想像することがあります。そして、幻影肢について、哲学的かつ非病理学的に考察した哲学者がいる。モーリス・メルロ＝ポンティである。彼が『知覚の現象学』で与えた「幻影肢」の記述は、トランスジェンダーの「性別違和」を非病理学的に記述しようとする私たちの試みに有用な視角を提示している。そこで、彼の「幻影肢」に関する記述をまずは確認してみよう。

3 身体イメージ

幻影肢とは、事故や戦争等で腕や足を失ったにもかかわらず、その「失われた」腕や足の存在を感じる現象である。例えば、「戦傷者がその腕の幻影肢のなかに、かつて彼の現実の腕をひき裂いた砲弾の破片をいまなお感じている」(メルロ＝ポンティ, 1975, p. 139) といった現象である。この幻影肢という現象は、生理学と心理学のいずれか一方では十分に説明できない現象である。それは一方では「脳に通じている感受的伝導路を切断すれば幻影肢が消失する」(メルロ＝ポンティ, 1975, p. 139) という意味で生理学的な構造に属するものであるが、他方「負傷時の情動や情勢を思い出させる情動と情勢があらわれたときに〔……〕幻影肢があらわれる」(メルロ＝ポンティ, 1975, p. 139) という点で心理学的な構造に属するものでもある。幻影肢は、生理学的条件、心理学的条件のいずれか一方のみではうまく説明できない現象である。それに対して、こうした「二系列に共通した地盤」(メルロ＝ポンティ, 1975, p. 140) を明らかにしようとするのがメルロ＝ポンティの試みであり、「身体イメージ」や「身体図式」といった概念がそこでは用いられることになる。

メルロ＝ポンティによれば、「腕の幻影肢をもつとは、その腕だけに可能な一切の諸行動に今までどおり開かれてあろうとすることであり、切断以前

にもっていた実践的領野をいまなお保持しようとすることである」(メルロ＝ポンティ, 1975, p. 147)。それを、彼は「欠損の拒否」とも呼んでいる。腕や足が「欠損」した事実を「拒否」して、「切断以前にもっていた実践的領野をいまなお保持しようとすること」が幻影肢の特徴である。だが、そのとき保持されるものとは一体何なのか。それはメルロ＝ポンティに倣っていえば、「習慣的身体」であり、「身体図式」であり、要するに「身体イメージ」である。

このような幻影肢という現象を説明するために、メルロ＝ポンティはまず、「習慣的身体」と「現勢的身体」という一組の概念を導入して、以下のように述べている。「習慣的身体」とはさしあたり「身体イメージ」や「身体図式」のことであり、「現勢的身体」とは「実際の物理的身体」という程度の意味だと解していいだろう。

第二の層〔現勢的身体：引用者注〕からはすでに消失してしまっている手の所作が第一の層〔習慣的身体：引用者注〕ではまだ姿を見せていることもあり、かくして、どうして私がもう自分のもっていない手をまだもっていると感ずることができるかの問題は、実際には、どうして習慣的身体が現勢的身体の保証人として働くことができるかの問題に帰着する。(メルロ＝ポンティ, 1975, p. 149)

メルロ＝ポンティに従えば、幻影肢とは「現勢的身体」が失われたのに「習慣的身体」がはまだ働いている状態のことである。言い換えれば、幻影肢とは、物質的な身体部位が失われたのに、その身体部位のイメージが残っている状態であると言える。幻影肢は、このような「習慣的身体」ないし「身体イメージ」という位相を鋭く示す例なのである。

ここでこのメルロ＝ポンティの記述がきわめて興味深いのは、私たちが先にみた精神病理学の図式とはちょうど反対の記述になっているという点で

ある。精神病理学の図式では物質的身体こそが「真理」であり、「現実の保証人」であったのに対して、メルロ＝ポンティの記述では、身体イメージの方が「現実の保証人」なのである。身体イメージこそが物質的身体を組織化し、下支えする機能をもっているのだ。そしてメルロ＝ポンティにとって、このことはなにも「特殊なケース」に限ったことではなく、私たち——いわゆる「正常人」も含めて——が身体を生きる一般的な仕方を指している。例えば、私が腕を搔くとき、その痒みを覚えた場所をいちいち調べ上げ、その上でその箇所へと手を運ぶのではない。私はわざわざ意識するまでもなく、一挙にその場所へと手を伸ばすのである。メルロ＝ポンティもいうように、「搔く能力としての手と搔くべき箇所としての刺された箇所とのあいだには、自己の身体の自然的体系のなかでひとつの生きられた関係があたえられている」（メルロ＝ポンティ、1975, p. 184）。身体には「ひとつの生きられた関係」が与えられているのであり、言い換えれば、私たちは身体イメージを媒介することによって身体とはじめて関係を切り結ぶのである。したがってメルロ＝ポンティに従えば、身体イメージとは「非現実的」な「妄想」ではない。むしろ、それなくしては、私たちは身体を生きることさえできないのである。

ゲイル・サラモンが述べているように、現象学、とりわけメルロ＝ポンティのそれは、「主体性を理解する上で身体が決定的である」（Salamon, 2010, p. 44）と主張する哲学であり、そこでは「私自身の身体性——身体の形状、あるいは振る舞い——の現象学的様態はそれ自身、真理を構成するものとして解される」（Salamon, 2010, p. 55）。現象学は、私が自身の身体に対してもつそのイメージや感じを、「妄想」としてではなく、「生きられた現実」として考察することを可能にするのである。そして、現象学を通して明らかになるのは、「感じられた身体」は「物質的身体」によって決定されているわけではなく、むしろ、「物質的な身体」の方がこの「感じられた身体」を介して生きられるということだ。したがって、サラモンが述べているように、「な

にかを現実として構成するのはその物質性ではなく、むしろ、可能性の地平であって、それが所与の人に表象するあらゆる様々な経験への開かれである」(Salamon, 2010, p.91)。

私たちがみてきたように、病理学的図式において、トランスジェンダーの「身体イメージ」は「非現実的」な「妄想」や「精神的な混乱」として解釈されてしまうのだった。しかし、メルロ＝ポンティをはじめとした現象学の理論を通して、私たちはその人自身にとって生きられる「身体イメージ」をまさしく「生きられた現実」や「真理」として考察することができるだろう。いまや私たちはようやく、最初の方で触れたプロッサーや森田の語りにも立ち戻ることができるだろう。

4 感じられた身体

実際、興味深いことに、プロッサーも「性別違和」の経験と「幻影肢」の現象の類似性を指摘している(Prosser, 1998, pp. 83-85)。たしかに幻影肢の場合には、もともと存在した身体部位が失われることによって生じるのであり、この点で、トランスジェンダーの性別違和の経験とは異なっている。しかし、プロッサーが指摘しているのは、ある種の「肉体的記憶(somatic memory)」が先立って存在しているという点で両者の経験には共通性があるということである。「トランスセクシュアルが整形された肉体的物質を彼あるいは彼女の新たな性器として我が物にするためには、感じられた想像的な次元において、〔手術に：引用者注〕先立つ性器の幻影化がすでに存在していなければならないのだ」(Prosser, 1998, p. 85)。プロッサーはまた、義足と性別適合手術のアナロジーをも行っている(Prosser, 1998, p. 85)。義足がうまくその人の身体に組み込まれるためには、その失われた足の「身体イメージ」ないし「肉体的記憶」が活用されなければならないが、プロッサーは同じことを性別適合手術にも指摘している。胸にしろ、男性器や女性器にしろ、

その部位の「肉体的記憶」の存在によって自己の身体により有機的に統合されるのである。プロッサーはここで明示的に現象学を参照しているわけではないが、このような記述はトランスジェンダーの性別違和や身体経験を理解する上で現象学の知見が有用であることを示しているだろう。

プロッサーはトランスジェンダーの「間違っただ身体」という経験を「ジェンダー・アイデンティティ」という用語ではなく、「身体イメージ」という言葉を用いて記述していた。それは、前者の用語を用いれば、必然的にそのイメージは「精神的な混乱」の範疇へと招き入れられてしまうからだといえるだろう。むしろ、トランスジェンダーの主観的な経験に即して言えば、物質的な身体こそが「間違っただもの」として感得されている。メルロ＝ポンティに倣えば、身体イメージこそが「現実の保証人」として物質的な身体を組織化するものであるからこそ、そのイメージと食い違う物質的な身体が「間違っただもの」として感じられるのだ。だからこそ、プロッサーが言うように、身体イメージは「物質的な力」をもつのであり、それはときに実際の身体的な性別移行を促すのである³⁾。

そしてつけ加えれば、トランスジェンダーの身体改造の程度が人によって異なるのはまさにその身体イメージが個人によってまちまちであり、諸々の差異を孕んでいるからだといえるだろう。性別違和は人によって、性器形成の手術を促すか、それとも乳房の除去に留まるか、あるいはホルモン治療で十分なのかは異なる。この「程度の差異」は、「ジェンダー・アイデンティティ」や「心の性」といった概念では十分に捉えることができない。その概念では「男女」という二元論的な「質的差異」しか可視化できず、このような微細な差異を捉えることができない。それどころか、このような二元論的差異はときに、例えば性器の手術を行っておらずホルモン治療だけしているようなトランスを「まだ本物の男／女になりきれない者」として周縁化する裁決の働きをももたらしてしまう。むしろ、性別違和とはゲイル・サラモンが述べているように、「質的差異」ではなく「程度の差異」であり、ス

ペクトラム上の差異なのだ。サラモンはゲイル・ルービンの論文の読解を通して、このようなスペクトラム上の性別違和を「違和連続体 (dysphoric continuum)」と呼んでいる。

実際、森田のケースにおいては、「臆」や「乳房」の存在を感じながら、しかし実際の手術には踏み切らないし、その必要性を感じていない。だが、この「臆」や「乳房」の存在に認められる、森田自身が自らに感じとる「感じられた身体」は、「男らしい特徴への嫌悪感」を生み出す。それは、「感じられた身体」という身体イメージが「物質的な力」をもち、「現実」の「物質的な身体」を「間違っただけ」として経験させ、違和を引き起こすからである。メルロ＝ポンティが述べていたように、彼が「習慣的身体」や「身体イメージ」と呼ぶもの——すなわち「感じられた身体」——こそがむしろ「現実の保証人」として働いているからこそ、このような事態が生じるのだ。

このように、トランスジェンダーの身体経験とメルロ＝ポンティの哲学を通して浮き彫りになったのは、身体とは単なる「物質的な身体」ではないこと、そして、トランスジェンダーの経験を精神疾患とみなす解釈の背景には「物質的な身体」を「客観的な真理」とみなす「真理の体制」が存在するという点である。そして、ジェンダーとの関係でとりわけ「物質的な身体」とみなされているのがセックスであり、とりわけ性器だろう。性器は一般に、あたかも性差を決定する本質的な真理であるかのように考えられている。だが実際のところ、私たちは道ですれ違う人の性別をいちいち性器によって判別しているわけではない。サラモンが次のように述べているように、むしろ、身体の特徴によって他者の性別を判断する方が普通だろう。

身体の物質性は〔……〕単なる性器以上のものによって取り巻かれている。性器はジェンダーの決定にそれほど結びついているわけではなく、むしろ、同様に物質的だが、より可視的な身体の特徴の側面の方がずっとジェンダーの決定に関連しているのだ。ジェンダーを決定する上

で、髪型や歩き方、服装や声の高さ、さらには身体の形や大きさなどが決定的なのであって、性器はほとんどの場合決して決定的ではないのである。(Salamon, 2010, pp. 181-182)

私たちはしばしば「髪型や歩き方、服装や声の高さ、さらには身体の形や大きさなど」の身体的特徴によって人の性別を判断するし、そしてこれらの身体的特徴がもつ意味は文化的に可変的である。したがってサラモンが述べているように、「セックスもまた文化的な生をもつ」のであり、それは「身体的カテゴリーでありながら、つねにそれ以上のもの」なのである (Salamon, 2010, p. 182)。再びメルロ＝ポンティに倣えば、「物質的身体」はたしかに「物質的」であるが、それは身体イメージによって媒介されることではじめて組織化されるものであり、この意味で、「人間にあっては、〈自然的〉と呼ばれる行動の第一の層と、加工された文化的ないしは精神的な世界とを重ね合わせることは不可能である」(メルロ＝ポンティ, 1975, p. 310)。したがって、セックスをその「文化的生」から切り離された自然的実在として考えることはできない。私たちは、セックスや身体をジェンダーや文化から切り離された物質として考えるのではなく、むしろそれらの「生きられた関係」を考察しなければならないのである。

私たちがトランスジェンダーの経験から学ぶことができるのは、身体には「感じられた身体」の次元が存在すること、そして、それは「物質的な力」をもっているということである。したがって誤解を恐れずに言えば、トランスジェンダーにとって「問題なのは身体 (bodies that matter)」であって、「心」ではないのだ。そして、身体とはただ単なる「物質」^{マター}ではないのであって、それは「感じられた身体」によってはじめて生きられるのである。このような「感じられた身体」を、「妄想」や「精神的な混乱」としてではなく、むしろ、人間存在の身体を構成する身体的次元として再考しなければならない。性別違和は「治療の対象」ではなく、「生きられた現実」なのだ。

注

- 1) 現在の DSM では、「性同一性障害」という用語は消え、よりニュートラルな「性別違和」という呼称が用いられている。これはトランスジェンダーの存在を「脱病理学化」する流れのなかにある変化であるが、DSM (『精神疾患の診断・統計マニュアル』) のなかに記載されている以上ははまだ「精神疾患」として考えられていることに変わりはない。だが、WHO が今年六月に発表した ICD (国際疾病分類) では、ついに「性同一性障害」(ICD の前の版ではこの用語が用いられていた) は「精神疾患」のカテゴリーから外され、「性の健康に関連する状態 (Conditions related to sexual health)」のカテゴリーに数え入れられることとなり、名称も「ジェンダー不一致 (Gender Incongruence)」に変更された。このことは「トランスジェンダーの脱病理学化」の主張と「保険治療のアクセス権」の主張とを同時に行うことができる顕著な例であり、そのような試みの具体的な成果である。
- 2) SPF デールによれば、「X-ジェンダー」という言葉が初めて一般読者向けの出版物に登場したのがこの吉永による森田の記述である (SPF デール, 2016, p. 60)。最近では、X ジェンダーに関する書籍『X ジェンダーって何? 日本における多様な性のあり方』も出版され、X ジェンダーという用語は森田の時代よりも広く人口に膾炙していると言えるだろう。同書では X ジェンダーは「性自認を表す言葉の一種で、出生時に割り当てられた男性もしくは女性の性別のいずれかに二分された性の自覚を持たず、自己の性別に関し、男女どちらでもない、あるいは男女どちらでもある、さらにはそれすらもどちらでもないといった認識を自己の性に対してもっている人々のことを指す日本独自の呼称」(Label X, 2016, p. 3) と定義されている。
- 3) とはいえ、プロッサーの理論には問題が残る。というのは、彼はトランスセクシュアルの「身体イメージ」や「身体自我」をあまりにも「実体的なもの」として捉える傾向があるからであり、したがってタリア・ベッチャーが指摘しているように「プロッサーの見解は身体自我のもっともらしい説明を提供する利点をもっている。しかし、また、身体の社会的概念がその自我に影響を与える仕方にほとんど注意が払われていない点を指摘しておくことは重要である」(Bettcher, 2009)。なお、このようなプロッサー理論の問題点に関しては、拙論 (藤高, 2019) をも参照。

参考文献

- 米国精神医学会, 2004, 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳『DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院。
- 米国精神医学会, 2017, 高橋三郎・大野裕監訳、染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉訳『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院。
- Bettcher, Talia Mae, 2009, "Feminist Perspectives on Trans Issue," <https://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/feminism-trans/>

- 藤高和輝, 2019 「身体を書き直す——トランスジェンダー理論としての『ジェンダー・ト
ラブル』」『現代思想』 vol. 47-3, pp. 176-190.
- Label X 編, 2016 『X ジェンダーって何? 日本における多様な性のあり方』 緑風出版.
- メルロ＝ポンティ、モーリス, 1975, 竹内芳郎・小木貞孝訳 『知覚の現象学』 みすず書房.
- Prosser, Jay, 1998, *Second Skins: The Body Narratives of Transsexuality*, Columbia
University Press.
- Salamon, Gayle, 2010, *Assuming a Body: Transgender and Rhetorics of Materiality*,
Columbia University Press.
- SPF デール, 2016 「X ジェンダーの登場——一人のケースから X ジェンダーについて考え
る」 Label X 編 『X ジェンダーって何? 日本における多様な性のあり方』 緑風出版,
pp. 58-67.
- Rubin, Gayle, 2011, “Of Catamites and Kings: Reflections on Butch, Gender, and Boundaries”
in *Deviations*, Duke University Press, pp. 241-253.
- 吉永みち子, 2012 『性同一性障害——性転換の朝』 集英社新書.

